

飯舘村スタディツアー参加レポート

フェリス女学院大学国際交流学部 4 年 KN

1. 参加にいたる経緯

私は大学1, 2年次において、大学ボランティアセンターの企画である福島の子どもたちのための保養プログラム*に参加していた。それは震災当時、高校2年生で無力であった私が大学生となることができることのひとつと思ったからであった。そしてプログラムで子どもたちと触れ合ったことで圧倒的な知識不足を痛感したことから、学生有志で勉強会を開き、原発や放射能の知識を深めると共に今後の保養プログラムに活かすことのできる情報を共有した。2年次にはその保養プログラムの代表を私が務めることになり、子どものための保養を考えさらに勉強をしたが、被災地に行ったこともない私が本やメディア、講演会などから得られる知識では限界があった。3年次はドイツに留学していたが、ドイツでも福島のことを聞かれることが多くあった。実際に行ったことがない、メディアの情報に頼り切っていた自分が話せることはドイツ人が知っていることと同じで、結局、2年間保養プログラムを運営しただけで福島のことを何もわかっていない自分に気づき、悔しく、もどかしい気持ちになった。帰国後、高雄先生と話す機会があり、そこで先生が飯舘村スタディツアーをしているということを知った。私はぜひ同行させていただき福島の実状を目で見て確かめ、自分にできることを考えたいと思い、今回の参加に至った。 *参考：http://www.ferris.ac.jp/~volunt/news/news-15_0903.html

2. 事前勉強会、飯舘村へのイメージ

保養プログラムの企画運営に携わったことで、放射能に関しては少なからず知識があったと思う。そのため、飯舘村の環境放射線毎時0.5～5 μ Svが高いということはわかっていたし、普段より線量の高い放射線を浴びるということに恐怖感もあったが、先生の説明でリスクコントロールへの理解が深まり、漠然とした恐怖感はなくなった。

飯舘村に関しては、「小松菜のケーキサレ」ワークショップで、前回スタディツアーに参加した学生から話を聞いた。そこから先生の助言を参考に飯舘村で行われている活動をインターネットと書籍を中心に調べ、事前勉強会で共有し、疑問に感じたことや知りたいと思ったこと、自分たちができることを考え、一枚のワークシートにまとめることができた。(資料参考)

勉強する前に私が抱いていた飯舘村のイメージは、「強制避難させられている村」という漠然としたものだけであった。しかし、勉強会を通じて、事故後しばらく経ってから避難することになったということ、事故以前に村を活性化させるために様々な活動をしていたことなどを知り、とても「悲劇的」だと感じた。また、そのような状況下でも前を向き、再生のために活動をしている村民がいることや、そこにボランティアだけでなく学者たちまでもが集まっているということに驚くと同時に、これからどのように復興していくのかということに興味を持った。また、飯舘電力に関しては、なぜ電力会社なのかという疑問が浮かび、「村」という言葉から浮かぶ古く伝統的な空間が、今どのような状態で、これからどのようなようになっていくのか、全く想像ができなかった。

3. 実際に飯舘村に行って感じたこと

やはり一番の衝撃は、フレコンバッグの山であった。飯舘村に入った瞬間、それまでののどかな緑あふれる風景に黒い物体が不自然に置かれ、かつて農地だったであろう場所には草が生

えていた。テレビで見ていた光景を目の当たりにし、あの福島に来たという実感が沸いた。また、宿泊先となった伊達市は、飯舘村から山をひとつ越えたというだけなのに、飯舘村のような「フレコンバッグの山」や除染された場所が見当たらず、「普通の街」であったということに私は大きな違和感を持った。

着いてすぐに、村民である菅野宗夫さんのお話を伺った。事故以前のことから現在まで、淡々とお話をしてくださったが、そこからにじみ出る悔しさをひしひしと感じた。目に見えた被害はないのに非難しなければならなかったこと、避難指示が遅く、行政や学者たちの言葉に振り回されたこと、このような状況で村民同士や家族同士で心がバラバラになってしまったことなど、事故後に感じた苦しみを知ったことで、人々を苦しめる一番の要因は、放射線による直接的な人体被害ではなく、それによって生まれた環境変化からの大きな不安やストレスだということがわかった。そして、菅野さんはそのような大きな苦しみを乗り越え、未来を考えて今を生きているということに、大地と生きる人の強さを感じた。

また、「ふくしま再生の会」の方々と東大の溝口教授、菅野さんの関係が対等でとても不思議に思えた。立場で見れば、ボランティアの方々、大学教授、村民ということで、「外から来た人」と「学者」と「地元民」ということで距離感があるのかと思ったが、菅野さんのお家にお邪魔してみると全員が村民なのではないかと思うほど打ち解けており、驚いた。飯舘村に関わる外部の方々が押し付けがましくなく菅野さんに寄り添って、というよりも菅野さんの思いに共感して活動しているというように見受けられ、とても素敵に感じた。

飯舘電力の小林稔さんも、苦しみを乗り越え、「今しかできないこと」と言って飯舘電力を立ち上げたということで、飯舘村民の強さを再び目の当たりにした。小林さんに村民との信頼関係があるからこそ農地転用などで設置場所が確保できるということを知り、信頼関係というのは菅野さんもおっしゃっていたことで、人と人が出会い、何かをするには絶対に信頼関係が必要であり、それを大切にしていかなければならない。そして今回の事故で行政と村民の間で信頼関係が失われてしまった。しかし復興に向けて、この信頼関係が重要なカギとなる。ふくしま再生の会も、溝口先生も、しっかりと村民である菅野さんと信頼関係を築いているからこそ、今のような素敵な関係性でもって村の復興を実現しようとしている。今、私たちにできることは、村を継続的に訪問し、様々な人と関わり信頼関係を築くことなのではないだろうか。そして信頼関係があれば、私たちにできることが見つかった時にそれを実行する力がある。今は私たちにできる「情報発信」の方法を手探りで探してはいる状態であるが、いずれは飯舘村の情報発信をする重要な人たちとして、信頼される関係になっていきたいと思った。

4. 私たちにできること

農学や物理学の専門知識がない私たちにできることは、「情報発信」であり、私たちの唯一の強みは、「女子大生（若い女性）」であることだと思う。情報発信のひとつの手段として、料理ワークショップなどを通じて若い女性を中心に被災地や放射能、健康に関しての話をし、被災地の現在の状態を知ると共に、マスコミに惑わされずに正しい知識を得るきっかけとなればよいと思う。また、学内でこの活動呼びかけることで、被災地に興味をもっている学生を集め、より多くの学生にスタディツアーに参加してもらい、様々なことを考えてもらえたらいいと思う。何より、福島で起きていることを他人事とせずに、彼らを思い寄り添える人が増えれば、世の中も変わってくるのではないかと、今回のスタディツアーに参加して思った。

5. 最後に

震災後、ボランティアに参加し、原発や放射能の事を自分なりに勉強したことで、自分は福島のことをある程度理解しているつもりになっていた。しかし、今回のスタディーツアーで私はとても重大な誤解をしていることに気付かされた。それは3でも述べたように、復興に向けて、放射線による人体被害が一番の問題なのではなく、事故が原因で人々が大きな不安やストレスを感じていることが問題ということだ。原発事故は、当たり前にあると思っていた故郷での生活や自分の命や家族、人々の絆を、ある日突然脅かすものなのである。まさに「百聞は一見に如かず」で、菅野さんや小林さんのお話を聞いて、やっとそのことに気づくことができた。そして、私はいままで被災者の気持ちに全く寄り添えていなかったと、深く反省した。気づくことができた今、より被災者の方々のお話に耳を傾け、寄り添い、私にできることを最大限やっていきたい。飯舘村で困難に立ち向かって生きている方々の強さに憧憬すると共に、自分も強く生きる人でありたいと思った。

参考資料:飯舘スタディーツアーワークシート

知りたいこと

- ① 汚染が発覚するまでの間何をしていたか？
(被ばくすることや原発事故後の意識に関して)
- ② 発覚した時の心境は？すぐにやったことは？
- ③ 震災、原発事故直後の生活について
- ④ 健康生活手帳は活用されているのか、どう感じているか？
- ⑤ 放射線量などは、どのようにして日々把握しているのか？
(職業や世代によって情報収集方法が違うのではないかな。どの情報を信用しているかな。)
- ⑥ 行政と飯舘村民との関わりは？(事故前と現在の違い)
- ⑦ 今後の復興ビジョン
ex) 全民帰還目標！ 帰れる場所に街を集約して産業を誘致する(浪江の場合)
* 飯舘村は？・・・飯舘電力、パイロットプロジェクトなどの目的
- ⑧ 復興活動は誰が？誰と？やっているのか？
(協力者、賛同者)
- ⑨ 支援者はどんな人か
(どういう人が興味をもち、寄付などをしているか)
- ⑩ 飯舘電力をつくろうとしたきっかけ、それにいたる経緯
- ⑪ 飯舘で復興活動をしている人への反響(周りの人の反応)
- ⑫ 都内などでも福島関連のイベントがあるが、関わりはあるか？

私たちにできること

情報発信

- ・被災地や復興の現状を知ってもらいたい・・・誰を対象とするか？
- ・⑨→支援者層がわかれば情報発信の方向が見える？
情報発信を支援者向けに作れば支援者が増える
- ・どう発信するか？ ex) 80*80での料理ワークショップ、映像配信など